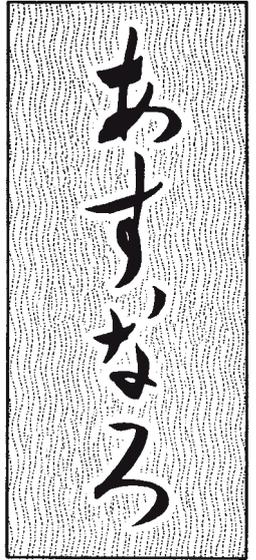


あすなろ



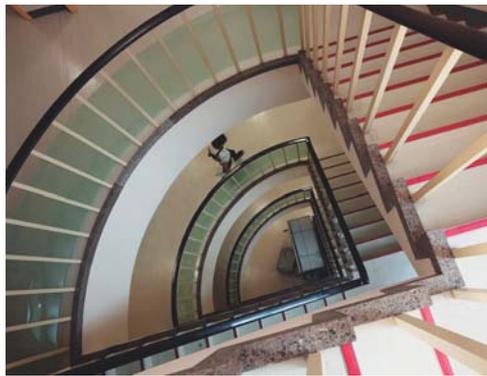
第35号

発行
弘前大学教育学部同窓会
鈴木 弘
所在地 弘前市文京町1
TEL 0172 (36) 2111 代表



教育学部長就任のご挨拶
『新しい時代へ』
教育学部長 戸塚 学

平成二十六年二月一日付けで教育学部長に就任しました戸塚学と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。これから二年間の任期は、第三期中期目標・中期計画への助走期間であり、大学・学部にとって大きな変革の時期にあたります。教育学部では、この十年間「実践的指導力・展開力の強化」を目指し、入学試験、カリキュラム、教育実習等、学生教育の根幹をなす部分について改善と研鑽を重ねてきました。これらの成果を総括し、教職員が一丸となって新しい時代に向けてスタートしたいと思ひます。



さて、就任間もない状況ですが、学部の近況や今後大きく進展すると思われる取組みについてご報告します。

まずは大学改革・教育学部改革の動向です。新聞等でも盛んに報道されており、皆様もご興味をお持ちかと思ひます。文部科学省は昨年十一月、国立大学改革の方針や方策、実施行程をまとめた「国立大学改革プラン」を発表しま

した。さらに、時を同じくして教員養成系分野の「ミツシヨンの再定義」の結果が公表されました。これは全国の国立教員養成系大学が、今後向かうべき方向性を示したものです。本教育学部では、文部科学省が示した教員養成の三つのスキームのうち、「地域密着型の教員養成」を指すことに決定しました。その内容についてまとめると、①青森県の義務教育に関する教員養成の拠点化・教職大学院の設置（青森県教育委員会との



挨拶に代えて
教育学部同窓会長 鈴木 弘

連携協力) ②実践型教員養成を念頭に置いた、質の高い小学校教員養成の展開(附属学校や公立学校との連携協力) ③生涯教育課程の廃止(教員養成への特化)等があげられます。今後、教育学部では、これらのミツシヨンを遂行に向けての学部改革が進展していきます。次に教育学部の教員構成についてです。皆さんも気になるところだと思いますが、教育学部の教員構成がかなり変化してきました。同窓会の方々におかれましては、馴染みの先生が大学から去られる

日頃は本同窓会の活動に深いご理解とご協力を頂き衷心より感謝申し上げます。

さて、本稿では報告に関する件と日常疑問に思ったりしていることの二つを書いてみたいと思ひます。

報告の一つは、教育学部校舎改築完成のお祝いとして「掛け時計」を贈呈し、正面玄関のあたりに設置するということが過日の役員会(昨秋、学部懇談会当日臨時に開催)で了解を得ているということであり、校舎完成時に本会として何らかの祝意を示すということについては昨年の総会で既に皆様のご承認を頂いているところであります。新年度の総会で具体的に決定し、速やかに進めてまいりたいと考えております。ご協力

ことは寂しくお感じになるものと思ひます。この春にも安藤房治教授、大谷良光教授、加藤陽治教授、島一夫准教授、麓信義教授の5名の先生方が定年退職されます。しかし、われわれは先捷の先生方の築いた歴史に、新たな若い力を得て、新しい時代への出発の準備を着実に進めて行きたいと考えています。そして、今後の教育学部の発展のためには、同窓会の皆様のご協力を欠くことはできません。どうかこれまでと変わらぬご支援をよろしくお願ひいたします。

の程よろしくお願ひ致します。

その二は学部の皆様のご尽力で、私たちの長年の願望でありました本会の資料保管等のための一室を確保して頂きましたが、現在のところ、資料保管以外の活用があまりなされていないということであり、知恵を出し合ってくださいたいものだと思っております。

報告の三つめは本会入会の学生数がなかなか増えないということであり、勧誘については学部側に依存することが多く心苦しい面もありますが、なお一層のご努力をお願いしているところであります。

唐突であり、わたし自身の浅学・無知を露呈することにもなりますが、ここで、時に、ふと思ふ疑問を一つ書いてみたいと思ひます。

いわゆる「ゆとりの教育」からの転換に関わる疑問であります。転換そのものよりも、なぜ転換が必要だったのかを国は果たして十分な説明をしていたのか、メディアはどう伝えたかという疑問であり、また「ゆとりの教育」が導入された際には、その意義や必要性などかなり肯定的、積極的に報道されていたように思ひます。それがどうでしょう。この度の転換にあたっては、端的に言えば「ゆとり教育の失敗で学力が落ちてしまった」という程度の取扱であつたような気が致します。少なくともわたしの狭い生活範囲ではそんな気がしていません。果たしてゆとり教育の成果はなかったのでしょうか。検証も十分にされたであろう結果を、その成果と課題をどう伝えたのでしょうか。国や教育に関わる各機関、メディアはそれらの情報をもっと積極的に、分かりやすく国民に提供し、その理解を図るべく努力する必要があるのではないのでしょうか。



草創期の教育学部正門(現弘前公園東門)



「ネット&いじめ問題」の研究・活動に同窓会の支援を願う(訴え)

技術教育 教授 大谷良光

私はこの三月で退職です。五年前から任意研究団体である、弘前大学教育学部「ネット・ケータイ問題」研究プロジェクト、学生団体である「弘前大学ネットパトロール隊」を組織し、学生の教員養成を兼ね実践的研究・活動を行ってきました。

活動当初は、悲惨であった掲示板「学校裏サイト」を見守り、そこに書き込まれているネットいじめ、誹謗中傷、自殺予告等を県教育委員会、協定を結んでいる弘前市、むつ市教育委員会に提供してきました。「助かりました。」このように指導して解決しました。という、フィードバック情報に喜びを感じ、気の滅入るような書き込みと格闘してきました。

その後、誹謗中傷等の書き込みは、外部からは見えにくいSNSに移行し、現在はLINE、Twitter等が主流です。また、バカッターと呼ばれる不適切情報発信、個人情報報の垂れ流しを見守り同じく情報提供をしています。

しかし、発見できる書き込みは氷山の一角、見守りだけでは子どもたちを守れないと、子どもへの出前授業、保護者・教員・教育関係者対象の講演等を開始し、現在週一回の割合で出動しています。これらの内容は、パト隊の独自調査を踏まえ、大谷が提唱す

る「ネットリスク教育論」「ネットリスクカリキュラム」に基づき展開するため、聴衆者のニーズに合った内容との好評を頂いております。

活動は学生が奮闘していることもあり、マスコミでも取り上げられ、大学内部でも評価されてきました。

今年の一月、私の退職に伴う研究・活動の継続のため、組織を再編しました。パト隊はボランティアサークル「あつぷる」ネット&いじめ研究会(「対外的には「弘大ネットパト隊」、プロジェクトは、弘前大学「ネット&いじめ問題」研究会とし、代表に新たに生涯学習教育研究センターの深作琢郎先生が着任し、大谷は会長職として係わることになりました。

しかし、学生が活動する場所がなく、予算的措置もなく、教員免許状更新講習会の関連科目の開設も不可能となり、

活動が停滞するこ
とが危惧
されます。
そこで、
皆様への
訴えは、
弘前大学
が、教育



NHK「おはよう日本」

が、教育

学部が地方国立大学としての社会的役割を果たすためにも、この焦眉の教育問題を、重点研究・活動として位置づけ、必要な体制を整えられるよう、働きかけて頂きたいということ。大学と県・市とが包括協定を結んでいる中、自治体等関係組織からのからの働きかけは大きい。どうぞ、よろしく願います。

協働の実践力と

教師としての成長

4年 伊井 芹 嘉
(前ネットリスク教育部部長)

今や弘大ネットパト隊の目玉になっている出前授業は、指導案の作成、講演はプレゼンの準備を仲



教職支援室は大盛況

教職支援室 客員教授 齋藤 厚

「教師を志す学生たちが教員採用試験に合格できるように支援すること」を任務として設置されたのが教職支援室です。二〇一一年にスタートしましたので、今年には四年目に入ることになります。

現在私たち三人の教職アドバイザー(職名は事務補佐員)が、毎日多くの熱心な学生たち(教育学部以外の学生も含む)に対応しています。

中学校校長経験者の山科實氏、小学校校長経験者で女性の角野君代氏と筆者、齋藤厚の三人です。学生に支援する内容は、一般教

間や先輩の支援の下に行い、その後模擬授業(リハーサル)を繰り返し、そして本番、その後の検討会となります。「パト隊に入ると、授業力・プレゼン能力と協働の実践力が高められる」と言われているのはそのためです。

よく出前授業先や講演先で、私たちが先方からお褒めの言葉をいただいたとき、大谷先生は「学生が成長するのは、厳しい中で学生同士で叱咤激励し合いながらやるからです。」とおっしゃいます。

この言葉が「協働の実践力養成の実際であった」と教職に就いた先輩方が口を揃えておっしゃるのを聞いて「なるほど」と思いました。

養、教職教養試験、教科専門試験などのいわゆるペーパーテストと実技試験を除くすべてです。小論文、自己PR書、集団討論、集団面接・個人面接、模擬授業等です。

十一月半ばに支援室主催で教員採用試験を目指す学生を対象に『教採ガイダンス』を行います。既に採用試験を突破した四年生たちが「自分の教採対策や体験談」を後輩に伝えます。その後、私たち三人が短時間で各試験のポイントや心構えなどをお話します。このガイダンスで「支援室活用のすすめ」を聞いたことをきっかけ

に、がんばる学生達で支援室は連日夕方遅くまで賑わうことになりました。

小論文は、自分が目指す自治体の過去問などを選び文字数に合わせて書いてきます。一日か二日前に提出してもらう事にし、予約に従って添削をします。添削したその小論文を元に「構成の仕方・表現の仕方」という技術的な支援と同時に、それ以上に「その課題の捉え方、それについての考え方・具体的実践論」などについて対話を通して考え学び合います。

自己PR書を始め討論・面接・模擬授業なども同じ考え方、方法論で行っています。つまり単に技術的な支援ではなく『子どもを愛する熱く真剣な先生』になってほしいという願いを込めて、教育論、子ども論・教師論・学校論に関する対話を大切にしながらの支援をしています。当然ですが、採用試験突破を意識したアドバイスも丁寧に行っています。このアドバイスが功を奏して合格しているのかどうか確認のしようはありませんが、我々アドバイザー三人は来室する学生の一人ひとりと常に真剣に向き合っています。通い続ける学生が目に見えて力をつけ、「あの学生随分伸びましたね。」という会話が支援室内でたびたび交わされます。

教育学部二階奥の実践演習室などと並んで教職支援室はあります。基本的に午前十時から午後五時が開室時間です。熱が入って延長することも時々あります。一度足を運んで見ませんか。



黒石市における 実験教室と教員研修活動

理科教育 教授 長南 幸安

本学がある弘前市に隣接する黒石市とは、その文化的・地理的に近いこともあり様々な場面で協働してきた。二〇〇八年に採択され青森県の教育力向上を目指した通称「ラボバスプロジェクト」においても、その実践に際して協力をいただいた。初年度の二〇〇八年度こそ、準備期間ということでも実践がなかったが、事業が本格始動した二〇〇九年度からは毎年、小中学校での実験教室と教員研修を行っている。二〇〇九年は九月に学習指導要領の改訂にあわせて薬品の基本操作から始まり、新たな学習項目であるコンデンサの使い方やプラスティックの性質について

の教員研修を行い、十月に六郷中学校で「物質の性質」の実験教室を行った。二〇一〇年度は中郷中学校において、九月に植田先生が「電子顕微鏡で探るミクロの世界」、十一月に東先生が電気と磁力の実験教室を担当し、十一月には私が黒石中学校で「極低温の世界」という授業を行った。またこの年は東英小学校から沖縄県の二小中学校と弘前市の草薙小学校をインターネットで繋いだ環境をテーマにした交流学習を十二月に実施した。翌年、二〇一一年度は十一月に六郷中学校において「生命を科学的に合成してみよう」というタイトルで、葉緑素や人間の血液に使

われている化合物を作る実験を行うとともに、学習指導要領にも記載されている「マイクロスケール実験」とはどういうものかの教員研修を実施した。

二〇一二年度は中郷中学校で安川先生とともに「水溶液の性質」の生徒向け実験を行い、教員研修としては前年に引き続きマイクロスケール実験としてシユリーレン現象と、電気分解で使用するUSB電源の部品製作を行った。

ラボバスプロジェクトの最終年度が二〇二二年度であり、二〇一三年度は大学全体としての事業でなくなつたが、この事業は評判が良く、継続の要望も多かったため、教育学部の事業として継続した。二〇一三年度は、十一月に黒石中学校において酸化還元学習項目の一部として、テルミット反応と空気酸化による色素の変色実験を行った。教員研修としては、だ液の働きの実験をマイクロスケール化した実験を体験してもらった。

以上、黒石市で実践してきた活動内容を列記してきたが、隣接市として教育学部にとって教員にも学生にとっても非常に価値のある実践活動の場である。大学と地域自治体の協働が求められているが、教育学部と黒石市は既に構築できており、今後の更なる展開を期待したい。

平成二十五年度 弘前大学教育学部・同窓会懇談会

例年、教育学部と同窓会との懇談会は十月末に大学構内で行われておりましたが、今年度は学部の都合により十一月二十七日に弘前パークホテルにて行われました。同窓会からは会長以下十八名の参加でした。

伊藤学部長の挨拶、続いて鈴木同窓会長の挨拶があり、副学部長の浅野先生の司会で懇談会が始まりました。

まず教育実習について教育実習部門長の清水先生から説明がありました。基本は「児童生徒にしっかりと対応する教員」の養成を目指すこととあります。そのため、教育実習は附属校での実習と協力校等での実習に分かれ様々な児童生徒に接することを目指し、一年次から始まり四年次まで継続的に計画されています。「介護等体験実習」や「学校サポーター実習」等の特徴的な実習を目指しているようです。国立教育大学協会が弘前大学教育学部の取り組みが評価されているとのこと。

次に就職支援委員長の小玉先生から平成二十四年度就職状況について説明がありました。二百三十五名中県内二十八名、県外四十九名が就職に就いているとのことです。就職率は就職以外も含め約九十四%で昨年の約九十八%からは下がったよう

です。

関東方面の採用試験は一次で二〜五倍を採り、二次は一次の結果をリセットして新たに集団面接、模擬授業を行いその結果で決定しているようです。学部では就職支援室を作り、退職教員（校長経験者）を三名おき学生のニーズに添えているようで人気があるようです。同窓会から学部への支援金の多くを活用しているとのこと

です。

附属学校園については浅野先生から説明がありました。手厚い保育をするため附属幼稚園の学級定数を変更するそうです。小学校では定数割れがあるようです。中学校では公立中学校との均衡を目指し一学級三十三人を検討しているとのことです。特別支援学校の耐震化校舎が完成したとのことです。



平成24年度決算

Table with 4 columns: Item, 24年度予算, 24年度決算, 備考. Rows include income items like 会費, 繰越金, 繰入金, 雑収入 and total 計.

Table with 4 columns: Item, 24年度予算, 24年度決算, 備考. Rows include expense items like 総会費, 評議員会費, 支部活動費, 通信費, etc.

2,324,312(円) - 1,939,066(円) = 385,246(円)
残額385,246円は次年度へ繰り越します。

平成25年度予算

Table with 4 columns: Item, 24年度予算, 25年度予算(案), 備考. Rows include income items like 会費, 繰越金, 繰入金, 雑収入 and total 計.

Table with 4 columns: Item, 24年度予算, 25年度予算(案), 備考. Rows include expense items like 総会費, 評議員会費, 支部活動費, 通信費, etc.

平成二十五年度 弘前大学教育学部同窓会 定時総会報告

平成二十五年度の定時総会は平成二十五年六月一日(土)午後二時から弘前パークホテルにおいて、鈴木会長以下二十八名の役員(会長、副会長、監事、各支部長、支部評議員、常任委員)の出席により行われました。

監事から会計監査報告、事務局から平成二十四年度庶務報告、決算報告、会則、平成二十五年度事業計画案、予算案と審議が行われ、その中で決算の合計の数字に誤りがあるとの指摘で訂正が行われ、その件について各支部に報告することで承認されました。

事業計画

- 1. 同窓会費納入依頼
2. 平成24年度会計監査、事務局会議
3. 平成25年度総会
4. 同窓会・教育学部懇談会
5. 同窓会報「あすなろ35号」発行
6. 弘前大学卒業式・祝賀会
7. その他

特別会計基金

<みちのく銀行定期預金関係>
5,853,955 + 1,408(利息) = 5,855,363円
5,855,363 - 500,000 = 5,355,363円
平成24年度予算へ繰り入れる
<青森銀行定期預金関係>
5,329,017 + 1,283(利息) = 5,330,300円
平成25年度予算へ500,000円を繰り入れる予定

平成24年度 庶務報告

- 1. 24年3月 同窓会費納入依頼
2. 24年4月21日 平成23年度会計監査、事務局会議開催
3. 24年6月2日 平成24年度総会開催
4. 24年6月22日 教育学部長へ支援金(80万円)を会長から寄贈
5. 24年10月31日 同窓会・教育学部懇談会、懇親会開催
6. 25年2月 同窓会資料を50周年記念会館から教育学部資料室(仮称)へ移動
7. 25年2月 新和印刷へ会報印刷を発注
8. 25年3月5日 同窓会報「あすなろ34号」発行、各支部へ発送
9. 25年3月22日 弘前大学卒業式・祝賀会へ会長出席

平成二十五年度役員

- 1, 支部長 弘前・中郡支部 笹森 義男(弘前市)
2, 黒石・平川・南郡支部 横山 岩雄(藤崎町)
3, 五所川原・北郡支部 田中 高志(車力小)
4, つがる・西郡支部 内山 博文(鯉ヶ沢町)
5, 青森・東郡支部 奈良 年永(青森市)
6, 八戸・三戸郡支部 澤田 明久(八戸市)
7, 三沢・十和田・上北郡支部 廣野 雅美(野辺地町)
8, むつ・下北郡支部 宮木 正信(第二田名部小)
9, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
1, 評議員 弘前・中郡支部 松田 千代治(弘前市)
2, 黒石・平川・南郡支部 秋田 豊(弘前市)
3, 五所川原・北郡支部 竹浪 誠也(五所川原市)
4, つがる・西郡支部 屋敷 政勝(つがる市)
5, 青森・東郡支部 西田 秀一(青森市)
6, 八戸・三戸郡支部 齋藤 信夫(八戸市)
7, 三沢・十和田・上北郡支部 岩田 真雄(十和田市)
8, むつ・下北郡支部 工藤 魏(むつ市)
9, 弘大教育学部支部 平岡 恭一(教育学部)
10, その他の支部 葛西 恒雄(弘前市)
常任委員 佐々木 健(弘前市)
対馬 浩二(尾上中)